

米価3年連続上昇

■区発

「全国的な天候不順の影響で野菜の値段が上がっている。コメも値上げするとすると相当な反発が出るだろう」と心配するのは、福井市居羽4丁目の米穀店ピロール健康タチヤの代表で、県米穀販売商業組合理事長を務める山本茂司さん(68)。

同店では年間約1,000俵の県産米を扱っており、そのうち特殊農法のコメを除いた約8割が外食向けの業務用。山本さんは「例えば福井市内の飲食店には毎月8,800kgのコメを販売しているが、10kg*200円の値上げに随分切れば月額1万7,600円、年間で21万円余りの値上げになる」と指摘。「外食業界は競争が激しく、そんなに値上げを認めてもらえないだろうか…」と苦しい胸の内を明かす。

■覆ったシンス

県内の米穀店の経営は激しさを増している。生産者の主食用米から飼料用米への転換による生産数量目標の達成などで、米価は15年度、16年度と年々上昇した。山本さんによれば「米価には2年周期のシンス」があり「17年度

3年連続の米価上昇に、外食向けの業務用米を扱う県内の米穀販売店から悲鳴が上がっている。県産ハナエチセンの2017年度新米の相対取引価格（卸売業者への販売価格）は1俵（60kg）当たり前年比15%高の1万4千円となり、コシヒカリも前年を上回るの確実とみられる。そうした中、スーパーなどの価格競争にさらされ、「薄利経営」を強いられている米穀小売店は「今年は仕入れ値を小売価格に転嫁しなければ経営が持たない」と訴えている。（田中弘）

県内米穀店は悲鳴

外食向け「価格転嫁させて…」



精米作業に励む山本さん。「今年には仕入れ値の上昇分を小売価格に転嫁させてほしい」と話す＝福井市居羽4丁目のピロール健康タチヤ

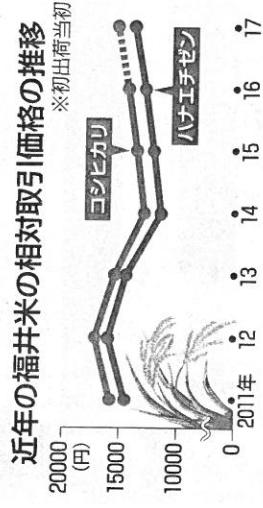
薄利経営、店舗数減る

は価格が落ちていく」と予測。ピロール健康タチヤではスーパーなどの小売価格なども見据えて、昨年は利益が減るのを覚悟で販売価格を押し上げた。ところがそのシンスを覆い、今年もハナエチセンの相対取引価格が上がった。しかも上げ幅が前

年の800円から、今年は1,200円大きくなった。山本さんは「この年で利益が割減った店もある。私を含め県内の小売米穀店の経営は限界に達している。値上げさせてほしい」と訴える。

■悲鳴を叫び

県米穀販売商業組合には、04



「天候不順が続く東北や関東の作柄によっては、福井のコメの価格はさらに上がる可能性もある。県産ハナエチセンの新米が初出荷された11日、JA関係者からこんな声がかかった。

取材ノート 行き過ぎは農家へ影響

県内の主なJAのハナエチセンの内金（生産者への前払い金）は60kg当たり1万1,800円。これに対し、2017年出荷スタート時の相対取引価格は前年比15%高の1万4千円に上

た。9月10日ごろの初出荷が見込まれる新米コシヒカリは内金が1万3千円だけに、相対取引価格は1万5千円以上が予想される。

16年度産米の全国作況指数

（平年＝100）はやや良の103だったが、17年度は8月以降、東日本を中心とした長雨の影響で「やや不良」に落ち込むの見方もある。そのなれば、

は県内77事業者が加盟していた。しかし売り上げ不振に伴って後継者不足から昨年は48事業者となり、今年にはさらに17減って31事業者となった。

その一因が、国民のコメ離れ。かつては1人当たり年間約俵（120kg）食べていたのが、今は1俵にも満たなくなった。山本さんは「炊飯ジャーの上ぶたの蒸気をこまめに拭き取らないなど、おいしい飯の炊き方、食べ方を知らない人が増えている」と憂慮。米食復活には「米穀店から消費者への積極的なアドバイスが重要」と考えている。

18年度から国が生産数量目標の配分を少なくするため、全国的にコメの生産量が増え、米価が下落するとの見方もある。ただ、山本さんは「飼料用米に対する国の厚い交付金水準が下がらない限り、一部の県を除いて生産調整は継続されるだろう」と慎重だ。県米穀販売商業組合理事長として「コメは日本の文化。20年後も何とか県内に米穀店を10店舗は残したい」と悲鳴を叫びを上げている。

価格が上向くのは自然の流れだ。ただ、急激な米価の高まりは、外食産業が、ずしのしやり量や定食の二飯の量を減らすなど、利益確保のための対策に乗り出す可能性がある。また安い外国産米に切り替える動きが出てくる恐れもある。

米価上昇は農家所得を高め、生産意欲の向上にもつながる。その反面、行き過ぎれば小売業者を苦しめるだけでなく、需給減た形式生産者にも思わぬデメリットを招く「もろ刃の剣」の側面もある。